

誰にでも起こり得る日常の一部

カナダに留学中、老人ホームでボランティアをしていた。当時、私は教養学部の子生だったが、うつ病などへの関心から医学にも興味を持ち始めていた。そんな時このボランティアで一緒だった地元医学生に、当時日本にはなかった「家庭医の存在を知らされることになる。

その老人ホームに行くたびに気になる女性がいた。車椅子に乗った女性の入居者で、いつも顔を見ると話しかけてくる。ひとしきり話をした後、決まって「そうか、あなたは日本から来たのか。日本語ができたらお話しできるのに。誰か日本語ができる人はいないの?」と始まる。何度も英語で会話しているのに、毎回同じことを聞いてくるのを不思議に思い、職員に聞いてみると、「彼女は『混乱』しているよ」との答え。今思うと、彼女は認知症だったのだ。

報道によると、認知症患者は10年後に730万人に達すると推計されている。850万人程度の10歳以下の子どもに匹敵する数だ。一方、うつ病患者も診断されているだけで既に1000万人以上いると言われている。

病院を受診しない人を含めると、その数倍はいるだろう。

うつ病までいかななくても、いわゆる「抑うつ」と呼ばれる状態は、誰でも一生に一度は経験

見創見 Tuesday

うつと認知症

すると言われる。しかし、当時の私は、認知症やうつ病を誰にでも起こり得る日常の一部とは考えられず、こちらも混乱してしまっていた。

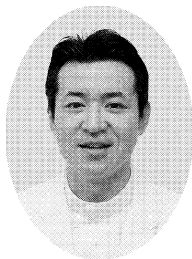
残念ながら、今でも、認知症やうつ病に対する誤解は至る所

に見られる。医療現場でさえ、認知症と聞くと身構えてしまうこともある。また、うつ病は治る病気であるにもかかわらず、「社会に復帰できないのでは」と心配する患者や家族も多い。

と医学との関係を論じた。異質なものとして疎外されてきたものが、社会の変化とともに当たり前になり、別の対象が異質なものであるとして扱われる。社会の変化によって何が正しいとみなさ

小倉 和也

はちのへファミリー
クリニック院長



おぐら・かずなり
1972年生まれ。2010年に国内でも珍しい家庭医療の医院を八戸市で開業。国際基督教大、琉球大医学部卒。八戸市出身。

病気があることや少数者であることが、異質なものとみなされ、社会から疎外されていく。この構図は人間の歴史の中で、対象を変えて何度も繰り返されてきた。

私卒論で扱ったフランスの哲学者フーコーは、社会の変化

会の中で少数派になることで、次第に異質なものとされていく。逆に15年前前まではなかった介護保険によるサービスは、今では当たり前のこととなっている。

成長すれば誰もが子どもから大人になるように、うつ病にもなり得るし、年を取れば認知症にだってなるかもしれない。私も現在は医師として働いているが、20年後には自分がうつになっているかもしれないし、40年後には認知症になっているかもしれない。今ではそう考えることができるようになり、当時のようにうつ病や認知症の人を見ても混乱することはなくなってきた。

医学部に入学して間もなく、カナダから一通のはがきが届いた。家庭医の存在を教えてくださいました。医学部が、獣医学部に転部したという知らせだった。私の人生を変えた出会いから数年で、互いの立場が大きく変わったことに不思議な感慨を覚えた。ゆくゆくは出会ったことすら忘れてしまうのかもしれないが、それも人生の日常の一部なのだと考えている。